特集 持続可能な未来を考える

日本人の自然観とサステナビリティ
――メディアの影響の視点から

［目白大学メディア学部メディア学科教授］
川端美樹 Kawabata Miki

持続可能な社会実現へ向けた目標の柱の一つである環境保全・保護は、社会の中で解決すべき重要な課題である。課題解決には、ライフスタイルや意識・行動の変化が必要だが、それには人々のもつ自然観が大きく関わると考えられる。本稿では、メディアが日本人の自然観に与える影響について研究を行っている筆者が、日本人の自然観形成の歴史的経緯や、それに対する人々の意識変化の調査から見えてきたものを踏まえ、それらがサステナビリティの実現にどのように関わるのか、社会心理学的なメディアの影響の視点から考察する。

「自然を愛し、自然に従い、自然を受容する日本人」像

日本人の自然観については、これまでに多くの著作が出版され、また議論が行われているが、中でもよく知られているのが寺田寅彦［＊1］の『日本人の自然観』［＊2］である。この著書で寺田は、複雑多様な日本の自然が、日本人に対して無限の恩恵を授けると同時に、不可抗な威力をもって支配してきたと述べている。そして、日本人は自然に服従することでその恩恵を十分に享楽し、それが彼らの自然観を形作ったとしている。また、寺田の主張に影響を与えた和辻哲郎［＊3］の『風土―人間学的考察』［＊4］では、「ある土地の気候、気象、地質、地味、地形、景観などの総称」である風土をタイプ分けし、日本の風土はモンスーン型の一つの形態であるとした。モンスーン型に生活する人間は自然に対抗する力が弱く、自然に受容的になるという。また自然の暴威、例えば大雨や暴風、洪水、旱魃といった災害が襲いかかるため、忍従的にもさせる。そのため、モンスーン型の風土に生きる人間は「受容的・忍従的」であり、それが日本人の自然観に影響を与えてきたという。

寺田や和辻の主張ともつながる、日本人は自然を愛し、自然と調和し、自然を受容するといった考え方は、現在でもよく見られている。2011年の東日本大震災の直後、大きな災害に襲われた日本の「注目すべき回復力」と、日本人の「堂々とした冷静沈着さ」を世界中のメディアが取り上げた際にも、同様の根拠が挙げられていた。鈴木貞美［＊5］は、近年、かけがえのない地球という認識と自然環境保護の考えが拡がるにつれて、日本人は「自然を愛する民族」であり、「自然と一体となって生きてきた」、「自然と人間を重ね合わせる」などの考えが浮上して流布し、本来否定的な部分もあったこれらの考え方が、肯定的な意味でのみ使われる傾向が強くなっているという。

しかし実際には、日本人は自然に従ってきただけではなく、長い間積極的に自然を利用してきた。平安時代の貴族が自然の美しさを詩歌に残しただけでなく、古代から農民たちも労働や生活の中で自然環境を注意深く観察し、敬い、利用してきた。そして、日本では以前から西欧に劣らず、自然環境に手が加えられてきたといわれる。

近年、里山という言葉をよく耳にする。古くは18世紀に遡れるこの言葉は、1960年代前半に再認識され、頻繁に使われるようになった。それは、60年代に大都市の郊外に開発の波が押し寄せ、低山地、丘陵地の二次林（伝統的な農業で昔から作られてきた薪炭林や農用林）が破壊されたことで、身近な自然保全への意識が高まったことが背景にある。里山は人間によって管理された自然、すなわち「二次的自然」であり、人間が利用する自然でもある。

また、森林利用の視点から見ると、日本では古代から人口増加とともに森林需要が増加し、乱伐とともに森林破壊が進んだという。室町時代には大掛かりな植林が開始されたが、江戸時代になっても森林破壊は進み、河川氾濫や台風被害がもたらされたため、幕府と諸藩は治水事業と森林の保全を行い、江戸時代の後期には日本の森林資源は回復した。さらに明治維新後も森林伐採が進み、山地・森林は再び荒廃したため、明治政府は林業強化政策を進めた。太平洋戦争が始まると、大量の木材が必要となり、再び全国各地の山が禿げ山と化した。そのため戦後、各地で大水害が発生し、荒廃林地への植林が国家再建の重要課題となったが、復興のための木材需要の急増に対応するため、政府は広葉樹からなる天然林の伐採跡地を針葉樹中心の人工林に置き換える政策を実施し、造林ブームが到来した。ところが、その後外国からの木材輸入が自由化され、価格の高い国産材が売れなくなると同時に、家庭用燃料が薪炭から化石燃料へと置き換わり、日本の森林資源は価値を失って林業が衰退したことは周知の事実である。現在、手入れが行われずに放置された人工林は荒廃し、危機的な状況にあるという。このように、日本では昔から森林を利用し、手を加えてきたが、現代になって初めて森林を利用しなくなったことによる危機を迎えている。

一方、林潤平［＊6］は、日本の教育がどのように「日本人は自然を愛する国民である」という心情を醸成してきたか、明治以降から昭和戦前期までの初等教育の理科、地理、国語の教育書や雑誌記事における教育論の分析によって考察している。それによると、理科教育では近代化の実現のために自然を愛で、自然と対するという「調和」と「征服」の両者が存在する教育論が見られ、地理教育では軍国主義的な国土愛に加えて、ナショナルアイデンティティの認識と確保のために国民化という観点から教育が行われた。さらに国語教育においても、教科書、教育書の両方で、国家主義的なイデオロギーを日本精神や神道の観念と結びつけ、日本人は自然を愛する国民であるという内容が教育されたという。また、寺田や和辻が述べた環境決定論的な主張については、日本人の民族的特殊性を論じるための主要な根拠として、太平洋戦争中のプロパガンダに使われたという指摘もある［＊7］。

以上のように、日本人が自然を愛する国民で、また人工的なものや作為的なことを嫌悪し、人間が自然をコントロールするのは身の程知らずだと考える自然尊重や自然信仰の姿勢は、国家主義的な時代背景において意図的に作られてきたといえる。しかしながら、これらの考え方は、実際の環境保護・保全とは相いれない部分がある。

現代日本人の自然観調査データに見られる特徴

それでは、現代の日本人の自然観は実際にどのようになっているのだろうか。その特徴を、調査データの結果から読み取ってみたい。

林文ら［＊8］は1990年代に、日本人の自然観を明らかにするために、大学生調査およびサンプル数2000人の全国調査を行った。分析の結果、日本人の自然観には、自然には人間の手を加えるべきではなく、また環境が大切で、自然に神秘感を感じ、動物に感謝の念を感じるという考えの構造が見られることが明らかになった。林らによると、それ以前に行われた森林観の国際比較調査において、ドイツでの調査では、自然（森林）に人間の手を加えることと神秘感（人間の知恵では計り知れない不思議さの感情）の関連が強かったが、日本では、森林に人の手を加えることは、心を大切にしない、また神秘感を持たない人によって行われるという

意識の構造が見られたという。つまり、ドイツでは神秘的な森も人間が作り、守ってきたと認識されているが、日本では、手を加えることは森林を壊してしまう、また畏れ多いことだと考えるという違いが見られた。林らは、このような考え方が、日本人に、人間の生活と自然環境を両立させた開発や保護を行うことに抵抗感を感じさせ、その実行を難しくしているのではないかと考察している。

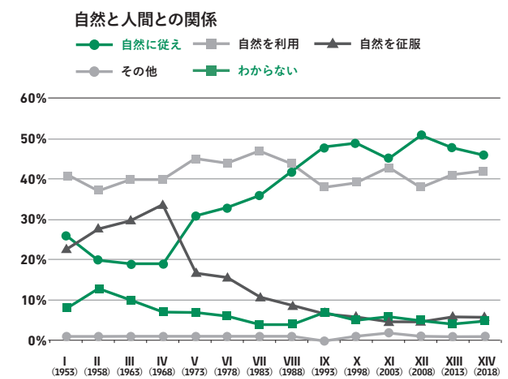
一方、竹下隆［*9］は日、米、英、スウェーデン、中国、フィリピン、ケニアにおいて行われた環境観、自然観に関する国際比較調査を基に、先進国と発展途上国の地球環境意識を比較した。その結果、先進国と発展途上国では、環境保全意識は共通しているが、先進国では科学技術観に楽観と悲観の両方が含まれ、開発より保全の意識が強かった。一方、発展途上国では高い科学技術信奉意識を基本とし、保全しながら開発するという意識が強かったという。さらに自然に対する畏敬の意識、手を加えることに迷いがある加害者意識を持ち、地球の復元力を信じる度合いは、全体的には先進国より発展途上国で高い傾向が見られていたが、日本の場合は、他の意識は先進国タイプでありながら、地球の復元力信奉では最も高い途上国型であったという。つまり、自然は人間が手を加えなくても自ら復元力があるという考え方が、日本では強く見られたのである。

また、統計数理研究所では、1953年以来、5年ごとに「日本人の国民性調査」という大掛かりな社会調査を実施しており、基本的には同じ調査手法、同じ質問項目で継続的に実施されている。その実施項目の中に「自然と人間との関係」を尋ねる項目があるため、その結果を基に、ここ70年ほどの自然と人間の関係についての意識の変化を見てみよう（図1）。

これは、「自然と人間との関係について、つぎのような意見があります。あなたがこのうち真実に近いと思うものを、ひとつだけ選んでください」という質問に、1.人間が幸福になるためには、自然に従わなければならない、2.人間が幸福になるためには、自然を利用しなければならない、3.人間が幸福になるためには、自然を征服してゆかなければならない、という選択肢で回答者が答えた結果である。**図1**を見ると、最新データである2018年に一番回答が多かったのは「自然に従え」で46%、2番目は「自然を利用」で42%であった。興味深いのは、「自然に従え」という回答が、1953年から1968年まで減少した後、上昇に転じ、1993年には「自然を利用」を抜いて1位になった後、25年間首位を保っていることである。それに対し、「自然を征服」という回答は、1953年から上昇していたが、1968年を境に下降し、1988年以降は常に10%以下と低迷している。これらの傾向は、1968年頃まで豊かさを求め続けた日本人が、ある程度の文化的水準に達し、その頃公害が大きな問題として顕在化してきたのを転機に、自然を征服するという考え方が急激に減り、自然に従えという考えが増え始めたのではないかと考えられる［*10］。

次に、日本人の自然観の年齢による違いについて注目してみたい。ここでは、著者が2019年に、日本全国の15歳から79歳までの3156人に行ったインターネット調査の結果を紹介する［*11］。前述の林らが行った自然観の調査を参考にして尋ねた、森林の維持のためには人の手を加えるべきかについての意見、そして人手の入った自然とありのままの自然のどちらが好きかという意見について、年齢とのクロス集計を行った。その結果、森林に手を加えることに対する意見や自然に関する選好（どちらも人手を加えるか、加えずにありのままがよいかを問う質問）は、年齢が若いほど手を加えずありのままの方がよいと答え、年齢が高いほど人手を加えた方がよいと答える統計的に有意な傾向が見られた。それらのうち、森林に手を加えることに対する意見の年齢ごとの結果を**図2**に示す。

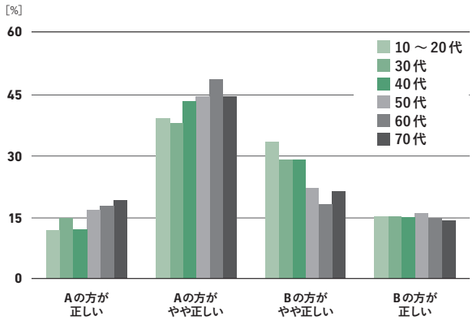
■図1：国民性調査における「自然と人間との関係」の時系列変化



https://www.ism.ac.jp/survey/KSResults/Tables/Section2.htmlより引用

■図2：森林に対する考えと年齢のクロス集計結果

A.「森林を美しく維持するためには人間の手を加えなければならない」という考え方と、B.「森林を美しく維持するためには人手を加えるべきでない」という考え方では、どちらが正しいと思いますか。



前述の林らの1990年代の調査結果でも、20代・30代の若年層において、森林に人手を加えるべきでないという意見が特に多いなど、若者に自然に対する素朴で宗教的な感情が高い傾向があったという。

また、川上正浩ら［*12］は大学生を対象とした調査で、若者の持つ自然観を構成する因子を探ったが、その主要な要因は、自然は人間の力ではどうにもならないものであるという「人智を超えた自然」因子であった。他には、自然は守るものであるという「保護を求める自然」因子、自然は優しく癒しとなるもの、人間にポジティブな影響をもたらすものであるという「癒す自然」因子が見られた。

さらに、筆者が大学生に行った自然観や環境観についてのインタビュー調査［*13］の結果でも、多くの回答者が、自然とは人が手を加えていないもの、人工的でないものと捉えていた。それに加えて、手を加えずにそのままの状態である自然を好み、それが自然のあるべき姿であると答える学生が多かった。また、彼らの自然観には全体として情緒的なイメージや言及が多く見られた。

以上のように、日本では昨今の調査データによっても、自然に畏怖を感じ、自然に従うといった自然観が見られている。また、若年層の方がより自然に対して手を加えるべきでないと答え、ありのままの自然を好む傾向が見られた。前述したように、戦前・戦中には日本人の自然愛が若者に教育されていた。戦後、教育の内容が変わっても、1960年代以降に再び、自然に従うべきだという考え方が台頭してきたのはなぜだろうか。もちろん、自然破壊や公害が起こったことがそのきっかけの一つであると考えられるが、1990年代以降、特に若者と自然との関係に距離が生まれ、自然は人智を超えている、自然は手を加えずそのままの状態であるべきだと考える若者が多いのはなぜだろうか。次節では、その原因の一つの可能性として、メディアの影響を取り上げたい。

メディアはどのように自然のイメージを形成しうるか

メディアは私たちに自然環境や環境問題についてのイメージや情報を伝えている。特に人々が直接その影響を知覚することが難しい地球環境問題については、マスメディアにおける報道がその問題の重要性の認知に大きな役割を果たす。さらにニュース報道においては、通常はメディアがその問題をある枠組み、すなわちメディアフレームにあてはめながら、情報が伝えられる。そのため、環境問題報道において、どのようなメディアフレームが用いられるかは、人々の環境問題の理解や意味づけに大きな影響を与える。

メディアフレームは、メディア報道の中で、展開する一連の出来事やその出来事同士のつながりに意味を持たせる中心的な概念やストーリーであり、何が議論の的であるか、またその問題の本質を伝えるものと定義されている。地球環境問題は、科学的なフレームで伝えられることもあるが、国家間の外交問題のフレームで取り上げられることもある。フレーミングのしかたが異なれば、同じ出来事の報道でも、受け手の理解は全く異なったものになる可能性があ

■表：災害報道写真のヴィジュアルフレーミング分析結果の概要

災　害	使用フレーム	ヴィジュアルイメージの特徴
東日本大震災・津波（2011年）	人智を超えた自然、現実的、助けられた命、人間的興味、政治	地震・津波発生直後は空中から写した俯瞰のイメージが多かった。津波や火事による被害や破壊された町、救助活動の写真が多く、被害者を写した写真は見られなかった。時間が経つにつれて、救助された人、救助活動や行方不明の家族を探す人々、避難場所の人々などの写真が増加した。
御嶽山噴火（2014年）	人智を超えた自然、現実的、助けられた命	噴火直後は空中から撮影した火山の写真が多かった。現地での被災者が撮影した噴火の写真も見られた。その後は救助活動にあたる自衛隊や警察、消防隊員の写真が多くなった。
熊本地震（2016年）	人智を超えた自然、現実的、助けられた命、人間的興味	地震後、倒壊した家屋、城、地滑りなどの被害の写真が多く見られた。また救助された人の写真も見られた。その後は救助活動や避難所の人々の様子が報道期間全体に見られた。
西日本豪雨（2018年）	人智を超えた自然、現実的、助けられた命、失われた命、人間的興味	家や道路などを破壊する洪水や地滑りの写真から始まり、救助活動やボランティア活動などの写真が見られた。被災地で行方不明の近親者を探す人、亡くなった家族を弔う人の写真が見られた。
台風19号（2019年）	人智を超えた自然、現実的、助けられた命	台風が接近中の嵐の前の静けさの様子や、台風が襲った後は洪水や破壊された町、救助活動の写真が見られた。車両基地で北陸新幹線が並んで浸水している写真が繰り返し報道された。

ることが明らかになっている。

これまでのメディアフレームに関する研究では、主にメディア報道のテキスト情報を質的または量的に分析する研究が行われてきた。最近では、メディアの視覚的イメージに注目したヴィジュアルフレーミング研究も行われている。さらに、人々がメディアから伝えられる情報を理解する際には、メディアフレームのみならず、受け手側のオーディエンスフレーム、つまり個人の価値観や知識による解釈のフレームも、問題の理解に重要な役割を果たすと言われている。ここでのオーディエンスフレームは、環境問題報道を理解する場合、受け手の自然観とも密接に関わっている可能性が高い。

筆者は現在、メディアが日本人の自然観に与える影響について、ヴィジュアルフレーミングの視点から予備的研究をいくつか行っている。ここで、その研究の一つを例として取り上げてみよう［＊14］。筆者は、2011年から2019年までに起こった5つの大きな自然災害の新聞報道写真を対象としたヴィジュアルフレームの質的分析を行った。そこで用いられたのは、「人智を超えた自然」、「現実的（物理的な被害）」、「助けられた命」、「失われた命」、「人間的興味（三面記事的）」、「政治」、の6フレームであった。分析対象は、朝日新聞（およびそのオンラインニュース）に掲載された、2011年3月の東日本大震災・津波、14年9月の御嶽山噴火、16年4月の熊本地震、18年7月の西日本豪雨災害、19年10月の台風19号の各災害報道に関する報道写真であった。

分析の結果（表）、すべての災害報道で「人智を超えた自然」フレーム、「現実的」フレーム、「助けられた命」フレームが主に用いられていることがわかった。他のフレームは災害によって用いられ方が異なっていた。どの災害でも、発生初期の報道写真は、衝撃的な災害や被害の写真が多く用いられていた。その後、救助された人、救助活動や避難所の報道写真が増えていくが、被害者の写真や遺体の写真が写されることはなかった。

主要フレームの特徴を見ると、特に災害発生後すぐに報道された、大きな自然災害そのものや、破壊された自然の被害に見られる「人智を超えた自然」というイメージは、日本人が自然に「受容的・忍従的」であるといった特徴を思い起こさせるが、このようなイメージを多用し、強調して災害を報道することは、自然への恐怖や畏怖の気持ちを助長する可能性がある。また、物理的な被害についての「現実的」フレームのイメージの多くには、人間の存在が全く見られなかった。このような「災害被害の非人間化」は、受け手の自然との心理的距離を遠ざけ、さらに自然を「人智を超えた、手を加えてはいけないもの」と認知させる影響があると考えられる。災害報道では、物理的な被害の様子を伝えるのは当然であるが、その伝え方に考慮が必要なことも考えられる。

前述の、筆者が行った大学生への自然観のインタビュー調査においても、東日本大震災の影響で自然に恐怖、畏怖の念を感じたという言及が多かった。イメージによるフレーミングは、テキストによるものよりも情緒的に大きな影響を与えると言われている。なお、2011年以前の災害のイメージについての分析、また朝日新聞以外の報道写真の分析を行わずに結論は出せないが、自然災害の報道において、どのようなイメージが伝えられるかにより、送り手が意図しない形での、受け手の自然観への様々な影響があることが考えられる。

また、先に述べた1960年代の公害や自然破壊が人々の意識を「自然に従う」方向に変えたという解釈も、当時の新聞やテレビで自然の汚染や破壊のイメージが多く伝えられたことが影響していることも考えられるのではないだろうか。

日本におけるサステナビリティへの取り組みに向けて

自然を愛し、自然に従うという日本人の自然観には、人間が自然をコントロールするなど畏れ多いといった自然尊重、自然信仰の姿勢が垣間見える。しかしながら、森林利用の例からもわかるように、自然に手を加えないことは、自然保護にはむしろマイナスの影響を与えることもある。「サステナビリティ」とは、持続可能性という意味である。将来に向けて、長期的な視点で科学的・計画的に自然を保護し、保全していくことがサステナビリティにつながる。それには自然に対する愛や畏敬の情緒的な気持ちも必要であるが、同時に科学的な視点でどのように自然を保全していったらよいかを考える理性的な認知も欠かせないだろう。それを考えると、これからの日本での環境保全のためには、自然を愛する心を基本としながら、保全するために自然に手を加え、利用することが保護につながるという構造の自然観がサステナビリティ実現に重要な役割を果たすのではないだろうか。

特に若者は、今後の環境保全の担い手となる存在である。自然は手を加えずそのままの状態であるべきだという考えは、環境保全・保護には結びつきにくい。それでは自然を保全するために利用するという自然観を、メディアはどのように伝えることができるだろうか。例えばテレビでは、自然をテーマにした番組だけが、自然についての情報やイメージを伝えているのではない。ニュース報道やその他のジャンルの番組においても、自然のイメージが伝えられることがある。サステナビリティへの取り組みの一つとして、送り手側が前述のような影響を考慮した報道やメディアコンテンツ制作を行う、そして教育においても自然保護や保全につながる情報や自然観を伝えていく必要があるだろう。

最後に、教育の中で、自然に手を加えながら保全するという考えを醸成していくためには、自然愛のみならず、科学的な知識や観点を得ることが欠かせないと考えられる。現在、小学校、中学校での学校教育では、自然を科学的に捉える教育がなされているが、それが若者の持つ自然への素朴な畏敬の感情とうまく結びついていない可能性も考えられる。例えば、自然の科学的な視点を理科で、そして畏敬の念は道徳で、と別々に伝える教育が行われている［＊15］が、両者を結びつけた環境保全・保護に関する総合的な教育が、自然に対する愛と科学的理解がバランスよく構成された自然観を醸成し、日本におけるサステナビリティを実現していくのではないだろうか。

注

＊1 日本の物理学者・随筆家・俳人（1878～1935）。代表作に『柿の種』『天災と国防』など。
＊2 寺田寅彦（1935）『日本人の自然観』岩波書店.
＊3 日本の哲学者・倫理学者・文化史家（1889～1960）。代表作に『風土－人間学的考察』『古寺巡礼』など。
＊4 和辻哲郎（1935）『風土－人間学的考察』岩波書店.
＊5 鈴木貞美（2018）『日本人の自然観』作品社.
＊6 林潤平（2020）『自然愛をめぐる教育の近代日本－自然観の創出と変容の一系譜』世織書房.
＊7 ジュリア・アデニー・トーマス　杉田米行（訳）（2008）『近代の再構築－日本政治イデオロギーにおける自然の概念』法政大学出版局.
＊8 林文・林知己夫・菅原聰・宮崎正康・山岡和枝・花房英光（1994）. 日本人の自然観についての予備的考察 INSS JOURNAL, 1, 159-175.
＊9 竹下隆（1999）. エネルギーと地球環境意識－先進国と途上国の国際意識比較 INSS JOURNAL. 6, 78-89.
＊10 林文（1999）. 意識調査からみた日本人の自然観－自然観の意識構造と若者の意識 人文・社会科学論集.15, 31-51.
＊11 Miki Kawabata (2019). Japanese View of Nature and Environmental Communication. Presented for the Environment, Science & Risk Communication Working Group at IAMCR (International Association for Media and Communication Research) Conference 2019.
＊12 川上正浩・小城英子・坂田浩之（2009）. 大学生の科学観・自然観について(2) The Human Science Research Bulletin, 8, 61-69.
＊13 川端美樹（2021）. 若者の自然観と環境問題－インタビュー調査による予備的考察 目白大学総合科学研究.17,37-45.
＊14 Miki Kawabata (2021). Media representation of disaster: The content analysis of images in Japanese newspapers. Presented for the Environment, Science & Risk Communication Working Group at IAMCR Conference 2021.
＊15 文部科学省（2017）小学校学習指導要領（平成29年告示）および文部科学省（2017）小学校学習指導要領（平成29年告示）解説　特別の教科　道徳編　いずれも2022年7月8日閲覧.

川端美樹（かわばた・みき）
目白大学メディア学部メディア学科教授、同大学院心理学研究科教授。慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻後期博士課程単位取得満期退学。専門は社会心理学（メディアと心理、メディアと環境問題など）。主な論文に、「科学的問題の報道に対する受け手の批判的態度」（『メディア・コミュニケーション』71，2021）、主な翻訳に『フィクションが現実になるとき－日常生活にひそむメディアの影響と心理』（カレン・E・ディル－シャックルフォード著、誠信書房、2019）などがある。